

国際シンポジウム

# 大正期文化表象と谷崎

2009年 3月21日 (土) 13:00~17:30

奈良教育大学 101講義室

コーディネーター 真銅正宏 SHINDO Masahiro

谷崎テクストにおける〈個〉のイメージ  
——大正期アナーキズムの考察に向けて

生方智子 UBUKATA Tomoko

結晶化する映画

スティーブン・リジリー Steven C. RIDGELY

写真と物語——谷崎潤一郎「友田と松永の話」——

張 栄順 CHANG Youngsun

第十四回谷崎潤一郎研究会

# 大正期文化表象と谷崎

## 第14回谷崎潤一郎研究会

日時 2009年 3月21日 (土) 13:00~17:30

会場 奈良教育大学 101講義室

### [発表要旨]

#### ■ 谷崎テキストにおける〈個〉のイメージ

——大正期アナーキズムの考察に向けて  
生方智子 (立正大学)

谷崎潤一郎の大正期の作品において、「天才」という存在が繰り返し描かれている。それらのテキストでは、「天才」を通して社会から超越した〈個〉のあり様を探求する試みがなされているのである。

テキストを検討すると、この超越の様態には二つのタイプがあることが分かる。たとえば、完璧な男性と女性との間に生まれた子どもこそが「天才」とであると語られる『創造』(大正四年)において優生学的思想が顕著に表れているように、生命管理を目指す近代的イデオロギーに従属し、その究極的な実現を目指そうという方向を見出すことができる。しかし、その一方で、『檻樓の光』(大正七年)では「女乞食」という優生学的には排除の対象となる存在の妊娠という出来事に「天才」の存在意義が賭けられているのである。

このように、谷崎テキストにおいて社会からの超越が目指されるとき、生命管理イデオロギーに対する極限までの従属と、それへの反逆という二つの方向が表れる。しかし、注意しなければならないのは、この二つの方向のいずれにおいても、生産と再生産の流れのなかに生命を組み込むことによって社会システムを作り上げようという近代的権力に対して、徹底した抵抗が行われていることである。

『創造』では、「天才」として誕生した子供には、「家名も財産も、恐らくお前の代ですっかり滅びてしまうだろう」という予言が下される。また、『檻樓の光』の胎児の父と母は、どちらも生産活動に従事しない者である。谷崎テキストでは、生命管理イデオロギーを参照し、それに従属し、あるいは反逆することで、近代社会から超越した〈個〉のあり様が語られると同時に、その〈個〉によって、生産と再生産という近代社会システムのネットワークを退け、権力が作り上げようとした社会とは異なる共同性を拓くことが試みられている。

本発表では、『創造』、『檻樓の光』そして『鮫人』(大正九年)のテキスト分析を通して、谷崎が描き出す〈個〉のあり様と、そのネットワークとしての共同性について検討し、それらが江戸川乱歩『二銭銅貨』(大正一二年)における〈個〉の表象とつながっていくこと、さらに、それらのテキスト群と大正期アナーキズム思想との交差について考察したい。(UBUKATA Tomoko)

問い合わせ先 明里千章: c-akari@cs.kinran.ac.jp  
日高佳紀: hidakay@nara-edu.ac.jp

#### ■ 結晶化する映画

スティーブン・リジリー (ウィスコンシン大学)

谷崎文学において映画をテーマにする作品『秘密』『肉塊』『人面疽』『痴人の愛』『青塚氏の話』などでは、映画での虚構と日常の現実との区別が曖昧になったか、ハイブリッド化されたものとして読まれがちである。だが、谷崎が映画を論じる時、「自然の浄化— Crystallization」(「活動写真の現在と将来」といったような結晶化する芸術として評価する。つまり、もう既に / 常にハイブリッドである自然を素材として、フィルムという媒介と演劇性を持つ弁士の排除によっていわゆる「純映画劇運動」の純粹性に興味を持ったといえるだろう。映画が(自然の)曖昧から(芸術の)明瞭へのプロセスの結果としてあるならば、映画と日常との間、虚構と現実の間にもそれらの境を超える前に、その境界線を引き、それぞれのカテゴリーを曖昧から明瞭へとすることに谷崎は興味を覚えたのだろう。

なお、これらの作品が谷崎の「転換期」に書かれていること、大活スタジオでの映画製作体験の前後であること、また谷崎のプラトニズムへの関心を持った時期でもあったことが結びつくなら、映画による屈折したアイデア論、アイデアとしての「映画」などへの考察を展開できる。大活後の作品にあらわれたポスト映画的描写、ポスト映画的人物なども見えてくる。つまり、映画を意識しながらわざと映画的ではない描写、あるいは映画というメディアによってうまく表現できない匂いや「見えない」ことのエロチシズムなどを表象するポスト映画的な谷崎文学へと移行する。(Steven C. RIDGELY)

#### ■ 写真と物語——谷崎潤一郎「友田と松永の話」——

張 崇順 (愛媛大学)

谷崎潤一郎「友田と松永の話」は、婦人雑誌『主婦之友』(1926年1~5月)に発表された作品である。この作品に関する先行研究は、この作品の後半部の本来同一人物である友田と松永の思想的差違が、谷崎の西洋趣味から東洋趣味あるいは古典趣味への変化、または肉体条件の変化による思想の変化など、大正期における谷崎文学の評価に準じて言及される傾向がある。本発表では、この作品に散りばめられている「写真」という語と「友田と松永の話」が婦人雑誌『主婦之友』に発表されている事実に注目し、この作品を検討する。大正末期のメディア界の動向や文化風俗を参照することで、この小説の解釈に同時代の文化的な広がりを持たせるためである。(CHANG Youngsun)

◆コーディネーター 真銅正宏 (同志社大学) SHINDO Masahiro